

45 三輪東朔に関する新知見

友部 和弘

『刺絡聞見録』の著作で知られる三輪東朔については、かつて既存資料を精査し報告した(『全日本針灸学会雑誌』五十巻二号)。今後の研究は、新出資料の出現を待たなければ進捗しがたい状況にあったところ、おりしも、昨年、大塚敬節旧蔵の修琴堂文庫中より、従来全く世に知られていない東朔の自著『葉真途異語』(二八一序刊)が発見された(同書の書誌については本年六月の日本東洋医学会で発表予定)。よって以下、本書により新たに知られた東朔に関する知見を報告する。

一、名称について

東朔は、字は望卿、号は浅草庵、あるいは三輪弾・大神匡明と称したことが従来知られていたが、本書によって、名は愿(すなお)、号は学古とも称したことが明らかになった。

二、出自・経歴について

本書に「我三輪明神ノ遠裔ニシテ」とあり、先祖は大神(三輪は別称)神社(奈良県桜井市)の出身であることが確定された。また「余東都二住シテ医行ヲ為ス事十余年」とあり、東朔が銚子より江戸に移居した時期がほぼ確定できる。それは本書の刊行年から逆算して、およそ一八〇〇年頃、東朔が五三歳前後のときとなる。

三、東朔の医方について

本書中、東朔が和方家としての立場をとる記述が数箇所にある。その中に「吾国神代ヨリ伝タル医療ノ方有、中古イカカシテカ棄レリ：如何ニモシテ神流ヲ再ヒ興サント」とあり、和方の衰退を憂い、その再興を期している。また「家流ヲ号テ今好古大和流ト呼フ」とも記す。その他「病ニ利有ルコトハ野夫ノ言タリ共必信用ス、遍歴中見聴シテ奇驗有ル方法一二ヲ爰ニ述ル」とあることから、民間療法を非常に重視し、その研究のために各地を遍歴していたことも明らかとなった。

四、異人について

『聞見録』によれば、東朔は天橋將監なる異人との出会

いがきつかけて刺絡に専心したという。奇疾を患った異人は東朔に治を請う。東朔には以前より試してみたい方法（動脈刺絡）があった。それに対して異人は「死生ヲ以テ先生ニ託セン：我ニ於テ悔ルコトナシ」と、その方を受け治癒する。東朔はこれにより刺絡を極められたことから、異人を刺絡の師として敬つたとある。

一方、本書では異人を異翁とも称し、東朔は多くの教示を受けている。出会いについても「老異人風（ふ）ト来テ我が相ヲ観テ曰：ヒトリ汝カ相ノミ我カ心ニ協エリ。依テ今吾国ノ上古神医ノ伝ヲト懐中ヨリ小巻ヲ出シテ、是コソ諸行ノ書ナリ。今汝ニ授与セン」と記す。

以上『聞見録』では医者と患者の関係で示され、天橋将監と実名をあげているのに対し、本書ではあくまでも異人を師匠的な存在で示し、仙人的な人物像で描いている。

五、中神琴溪について

『聞見録』では、大田元貞序と伊藤大助自序にわずかに記されるに過ぎないが、本書では十数箇所におよぶ。そこには「中神生々堂著述ノ書ハ実事妙意ヲ顯タル書也。

当今ノ医、心ヲ留テ熟読スベシ。彼書ノ真意ヲ知レハ一切諸芸共ニ大キニ益アルコトナリ」とあるなど、その他の記述でも琴溪を高く評価している。ただ「中神生々堂ハ：刺絡ノ術ニハ少シク足ラサル所有：見識ハ中神氏ノ皮肉ニ分入り施術ハ予ヲ学ヒ：」とし、こと刺絡の術においては、東朔が優位であることを主張している。

六、郭右陶について

江戸後期の刺絡ブームに影響を与えた郭右陶『痧脹玉衡』に対し、琴溪は『生々堂医譚』で「吾門ハ郭右陶ノ論モ方モ取ネドモ」とし、本書でも東朔は「郭右陶痧病ヲ刺ノ説ナトハ論スルニタラス」と、同じ見解を有している。

本書は東朔の自著であるがゆえに、『聞見録』では知り得なかつた東朔の人間像を浮彫にしうる、貴重な新出資料といえる。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）